

なんで今さら万博？

6月16日の「カジノ万博」レポートを投稿すると、いつもより反響が大きかった。興味深かったのは、フェイスブック仲間の女性からのコメント。これだけネットで情報が得られる時代に、「万国博覧会」なんかに意義があるのかと。もっともなコメントであり、講演でも使った資料をもとに、標題について考えてみたい。

まずは朝日新聞6月13日夕刊「大阪万博 夢てんこ盛り」から。写真のように、これまで明らかになった構想には驚きの「未来予想図」が並ぶ。果たして実現できるのか、夢で終わるのか。政府の提案書には「センシング・バイタル・サイエンス」という言葉もある。来場者が自分の体調を計測して健康チェックを受けられ、結果をもとに「疲労の蓄積や熱中症、脱水症状を防止」することを狙う。希望者には食生活や運動習慣を提案し、来場者の集団データを分析して新しい健康増進法を探る取り組みも考える。一方、過去の万博の課題として指摘されるのが、長蛇の列。提案書には「パビリオンの待ち時間ゼロ」との目標を明記。最新技術でパビリオンの混雑状況を見えるようにして、来場者にストレスを感じさせず、会場内を移動中も楽しめる体験プログラムを用意することで、退屈な時間を「ゼロ」にするという。「バーチャル参加者は最大80億人」という構想もある。会場への来場者数は約2800万人を見込むが、VR(仮想現実)などの技術を使い、国内外から会場のパビリオンにいるかのような体験をしてもらう仕掛けだ。理論上は「最大で(25年の推計人口の)世界全80億人が『参加』できる」とうたう。

まさにファンタジーだ。別に万博会場に行かなくても楽しめる。わざわざ万博会場に行っても、健康診断をしなくても。疑問が次々と湧いてくる。

次に毎日新聞6月12日から。会場建設費を約1250億円と試算。国、大阪府・市、経済界で3等分して負担する方針だが、経済界の負担方法は今後の議論で、実際の負担は試算を上回る可能性がある。人件費や光熱費などの運営費約820億円の9割は入場料収入で賄う計画だ。00年のドイツ・ハノーバー万博は4000万人を見込んだ半分以下で、約1200億円の赤字となった。展示が環境問題に偏りすぎ、エンターテインメント性に欠けたためとみられる。この記事に関連した石川智久・日本総研関西経済研究センター長のコメントが興味深い。「万博の成否を左右するのは何よりもコンテンツ。ディズニーランドやユニバーサル・スタジオ・ジャパン並みに面白いものにしなければ人は集まらない。万博はテーマ性が大事だが、説教じみた内容では駄目。深く考えずに楽しめて、自然と社会課題に目が向くような仕掛けが必要だ。」

これを読んだあと、朝日新聞15日朝刊のこんな記事にも注目した。東京ディズニーリゾートを運営するオリエンタルランドは14日、追加投資としては開園以来最大規模となる約2500億円を投じ、2022年度中のオープンをめざす。



(2018年6月25日)